

背景・目的

市内における摘み取り春菊の基幹品種‘恵流’は、高温期の品質低下が課題となっているため、耐暑性・収量性に優れる品種を検討しました。

結果

作期	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月
1	4 / 1	4 / 24	5 / 17	7 / 8				
2		5 / 28	6 / 17	7 / 5		9 / 13		
3					8 / 6	8 / 22	9 / 11	11 / 14

播種 定植 収穫

品種名	種の種類	発芽率	障害発生	収量性	特徴
 恵流 (標準品種)	コート	○	△	○	・ 発芽率が高い (75～90%)
 さとあきら	生種	×	×	△	・ 発芽率が低い (48～63%) ・ 着蕾が多い ・ 作期 2 での収量が低い
 きわめ中葉春菊	生種	△	△	○	・ 発芽率がやや低い (63～64%) ・ 作期 2 での障害の発生が少ない ・ 作期 2 以降の収量性が高い
 菊蔵	生種	×	△	○	・ 収量性が最も高い ・ 作期 2 での障害の発生がやや少ない ・ 発芽率が低い (49～54%)
 おやさと中葉	生種	×	△	△	・ 作期 2 での障害の発生がやや少ない ・ 発芽率が低い (44～56%)
 香取	生種	△	△	×	・ 発芽率が同等かやや低い (61～75%) ・ 収量性が低い

最も高温な作期 2 と高温期から冷涼期に移行する作期 3 に当たる作型では、‘きわめ中葉春菊’が標準品種と同等と評価できます。

結果の活かし方

3 作期を通して‘恵流’以上と評価できる品種はなかったため、同一品種を通年で作付けする場合は‘恵流’が適した品種になると考えられます。

ただし、高温期の障害発生が問題となるほ場の場合は、‘きわめ中葉春菊’の障害の発生が少ないという特徴を活かし、時期に応じた品種の使い分けが考えられます。